

元岡・桑原遺跡群10

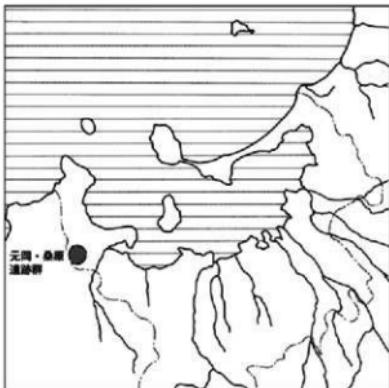
— 第46次調査報告 —

2007

福岡市教育委員会

元岡・桑原遺跡群10

— 第46次調査報告 —



遺跡略号 MOT-46
調査番号 0538

2007

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの史跡や文化財が分布しています。本市では、こうした文化財の保護と活用に努めているところであります。各種の開発事業によってやむをえず失われる埋蔵文化財については、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、西区大字元岡地内における主要地方道福岡志摩線の拡幅工事に先立って行われた元岡・桑原遺跡群第46次調査の成果について報告するものです。元岡・桑原遺跡群は、近年の九州大学統合移転事業に伴う継続的な発掘調査により、縄文時代から中世までの膨大な遺構と遺物が検出されています。本調査においては、道路拡幅部分の細長い調査範囲でしたが、弥生時代から中世の遺構が検出されており、特に中世の濃密な遺構の検出は新たな発見となりました。こうした地道な調査の積み重ねによる資料の蓄積が、地域の歴史を少しずつ明らかにするものと考えられます。

本書が市民の皆様の文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました、土木局はじめとする関係各位の方々に對し、厚く感謝の意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

..... 例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成17（2005）年8月8日から平成17（2006）年10月11日まで福岡市土木局西部建設第2課の委託により発掘調査を実施した、主要地方道福岡志摩線の道路舗装工事（拡幅工事）に伴う元岡・桑原遺跡群第46次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をSD、土坑をSK、柱穴をSP、性格不明遺構をSXとしている。なお報告の遺構番号は、調査小区ごとに付けられた調査時の番号をもとに整理時に一部修正して報告するものである。
3. 本書の遺構図に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものである。ただし、土木局が道路工事のために設置した国土座標測量基準杭より国土座標を移動して調査区の位置を求めており（Fig.3,4）。なおこの国土座標は日本測地系（第2系）である。またレベルも土木局設置の測量基準杭のレベルより移動した。ただし巻末の抄録の座標は世界測地系である。
4. 本書に用いる遺構図は、久住猛雄が実測し作成した。遺物の実測は主として西堂将夫が行い、一部を久住が行った。拓本は成清直子が行った。製図は成清、坂井かおり、平井宏美、宇野美嘉、久住が行った。遺構写真および遺物写真是久住が撮影した。また本書の編集および執筆は久住が行った。
5. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面・写真）は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

目 次

| | | |
|------------------------|-----|----|
| I. | はじめ | 1 |
| 1. 調査に至る経緯 | | 1 |
| 2. 調査の組織 | | 1 |
| 3. 調査地点の位置と周辺の歴史的環境 | | 3 |
| II. 発掘調査の記録 | | 7 |
| 1. 調査の概要と経過 | | 7 |
| 2. A区の検出遺構 | | 10 |
| 3. B区の検出遺構 | | 15 |
| 4. 出土遺物 | | 18 |
| III. 小結 | | 25 |
| 表 1: 福岡市内における東洋土器出土一覧表 | | 26 |

挿図目次

| | | | |
|--------------------------------------|------|---------------------------------------|----|
| Fig. 1 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15,000) | 2 | Fig.13 A-4区東側土層断面図 (1/50) | 12 |
| Fig. 2 46次調査地点の位置 (1/4,000) | 4 | Fig.14 B-1区平面図、南東側土層図 (1/80) | 13 |
| Fig. 3 46次調査A区の位置 (1/500) | 6 | Fig.15 B-2区西平面図、北西側土層図、中央断面図 | |
| Fig. 4 46次調査B区の位置 (1/500) | 6 | (1/50) | 14 |
| Fig. 5 元岡・桑原 46次調査A区全体図 (1/100) | (折込) | Fig.16 B-2区西・南東側断面図 (1/50) | 15 |
| Fig. 6 元岡・桑原 46次調査B区全体図 (1/100) | (折込) | Fig.17 B-2区中央断面図 (1/50) | 15 |
| Fig. 7 A-1区平面図、西側断面図 (1/50) | 7 | Fig.18 B-2区東平面図、南東側土層図 (1/50) | 16 |
| Fig. 8 A-1区土層図・断面図①～③ (1/50) | 8 | Fig.19 B-2区東・北西側土層図 (1/50) | 16 |
| Fig. 9 A-2区平面図 (1/50) | 9 | Fig.20 B-3区平面図、土層図 (1/80) | 17 |
| Fig.10 A-2区西側(上)・東側(下)土層図、断面図 (1/50) | 10 | Fig.21 元岡・桑原 46次出土遺物実測図 (1) (1/3,1/2) | 19 |
| Fig.11 A-2区断面図④～⑤ (1/50) | 11 | Fig.22 元岡・桑原 46次出土遺物実測図 (2) (1/3,1/2) | 20 |
| Fig.12 A-4区平面図 (1/50) | 12 | Fig.23 元岡・桑原 46次出土遺物実測図 (3) (1/3,1/2) | 22 |

本文中写真 (Ph.) 目次

| | | | |
|---------------------------|----|---------------------------|----|
| Ph.1 A-1区調査状況(南から) | 5 | Ph.6 B-1区トレンチ調査状況(南西から) | 13 |
| Ph.2 A-2区作業風景(南から) | 5 | Ph.7 B-2区トレンチ遺構検出状況(南西から) | 15 |
| Ph.3 A-2区調査状況(南から) | 8 | Ph.8 B-3区トレンチ遺構検出状況(南西から) | 17 |
| Ph.4 A-3区トレンチ断面確認状況(南東から) | 11 | Ph.9 出土遺物写真(縮尺不同) | 24 |
| Ph.5 A-3区トレンチ断面確認状況(東から) | 11 | | |

図版目次

| | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| PL.1 1. A-1区遺構断面状況(北から) | 13. A-4区遺構上部剥離状況および西側壁面土層状況(東から) |
| 2. A-1区遺構断面状況(南から) | 14. A-4区SE031,SP033上部遺物出土状況(東から) |
| 3. A-1区北側遺構断面状況(北から) | 15. B-1区西側調査状況(北東から) |
| 4. A-1区中央遺構 SP004 他断面状況(北から) | PL.4 16. B-1区調査状況(北東から) |
| 5. A-1区南側遺構断面状況(南から) | 17. B-2区西側遺構(001他) 挖削状況(南西から) |
| PL.2 6. A-2区遺構断面状況(北5) | 18. B-2区中央遺構検出状況(南西から) |
| 7. A-2区遺構断面状況(南から) | 19. B-2区東側遺構断面状況(北東から) |
| 8. A-2区SE001 他断面状況(東から) | 20. B-2区西側遺構 001土層(南東から) |
| 9. A-2区北半遺構断面状況(北から) | 21. B-2区東側遺構 010,012土層(南東から) |
| 10. A-2区中央(012,014他) 遺構状況(東から) | 22. B-2区東側遺構 SE001(北西から) |
| PL.3 11. A-4区遺構検出状況(北から) | 23. B-3区SD012(東) 断面状況(南西から) |
| 12. A-4区遺構上部剥離状況(北から) | |

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成17年（平成16年度）1月5日付で、福岡市土木局建設部西部建設第2課より、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対し、福岡市西区大字元岡地内における主要地方道福岡志摩線道路の拡幅工事（事業名は「道路創設工事」となっている）に関して、埋蔵文化財の事前調査についての依頼文書が提出された（埋蔵文化財課事前審査番号16-1-100号）。申請地周辺は元岡・桑原遺跡群として周知され、九州大学統合移転事業等に伴う幾度もの発掘調査により埋蔵文化財の広がりが確認されており、申請地の道路用地についても埋蔵文化財が存在することが十分予想された。そのため埋蔵文化財課では、工事に先立ってまず試掘調査が必要であることを土木局に回答し、協議により最初の試掘調査を平成17年1月17日に行った。この結果、5本の試掘坑（トレンチ）のうち1ヶ所（本調査のA区にほぼ相当）で遺構の存在が認められた。しかしこの時点では、拡幅工事予定範囲のうち用地取得などの関係で試掘調査が可能な範囲は限られていたため、埋蔵文化財の調査が必要な範囲について確定できなかった。そのため再度の試掘調査および発掘調査が必要な場合の本調査は平成17年度に行うことになった。平成17年度の試掘調査は、平成17年5月30日、6月3日、6月16日の三度行った。新たに計10本の試掘トレンチを設定し、このうち場所を接する2本のトレンチ（本調査のB区にほぼ相当）で遺構または遺物包含層を確認した。これらの敷度にわたる試掘調査の結果により工事予定範囲のうち遺構または遺物包含層が確認された箇所について、道路の建設工事に先立って発掘調査が必要である旨の回答を平成17年6月21日付で土木局に回答した。これを受け、土木局西部建設第2課と埋蔵文化財課で協議を行い、平成17年8月初旬頃より本調査を開始することで合意に達した。その後、7月までに土木局による道路用地の取得や仮整地、基準測量杭の設置がなされ、7月27日に現地において土木局担当者と埋蔵文化財課担当者（事前審査担当および本調査担当）による現地確認と事前協議、近隣への周知を行った。こうして事前の準備が整い、平成17年8月8日の現地仮設事務所への機材搬入によって、本調査を開始した。

なお道路工事範囲は狭い幅（拡幅範囲）であるため、非常に深い遺構検出面の場所では安全上の問題（法面傾斜確保の困難）から発掘調査が非常に困難であるため調査を断念することになった箇所や、既存の生活用地（生活道路）確保の必要性のため（調査した場合の調査区と廃土置場とのスペースの関係や安全性を考慮して）、発掘調査の実施に至らなかった場所も生じている。さらに本調査においても遺構検出面が非常に深くなった箇所や土質により崩落の危険性がある箇所については、安全性を優先して遺構の完全な掘削をあきらめ、上面の調査で終了せざるを得なかった場合も生じた。道路建設は記録保存を要する恒久的建造物の建設にあたるために、可能な範囲で事前の発掘調査を行うこととしたが、今回の道路拡幅工事は比較的表層の地盤改良工事を伴う創設工事であり、埋蔵文化財への影響が比較的小ないことから、調査が物理的に困難な箇所については、今回は発掘調査を必ずしも完遂しないという方針であったことをあらかじめ断っておきたい。

2. 調査の組織

調査委託 土木局建設部西部建設第2課（令達事業）

調査主体 福岡市教育委員会文化財部

埋蔵文化財課（平成17年度）、埋蔵文化財第1課（平成18年度）（平成18年度組織変更）

調査総括 埋蔵文化財課長（平成17年度）、埋蔵文化財第1課長（平成18年度） 山口謙治



Fig.1 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15,000)

埋蔵文化財調査第1係長（平成17年度）、埋蔵文化財第1課調査係長（平成18年度）

山崎龍雄

調査庶務 文化財整備課管理係（平成17年度）、文化財管理課管理係（平成18年度） 後藤泰子

事前審査 埋蔵文化財調査事前審査係 井上蘭子（前任）（平成17年度）、星野恵美（平成18年度）

試掘担当（平成16・17年度）事前審査係 井上蘭子、大規模事業等担当課 米倉秀紀、池田祐司

調査担当 埋蔵文化財調査第1係（平成17年度）、埋蔵文化財第1課調査係（平成18年度）

久住猛雄

なお本調査における作業では、主に地元周辺の方々からなる発掘作業員の協力を得た。整理作業においては西堂将夫、宇野美嘉、坂井かおり、成清直子、平井宏美の手を煩わせた。また本調査においては、地元の方々のご理解とご協力を得た。本調査に至る協議および条件整備などについては、土木局の担当者の方々のご理解とご協力を得た。これら関係者の方々に対し、記して感謝申し上げたい。

3. 調査地点の位置と周辺の歴史的環境

元岡・桑原遺跡群は、福岡市の西端に位置し、糸島半島基部東側の丘陵地帯とその裾の谷部に広がる遺跡群である（Fig.1）。第46次調査地点は遺跡群の南西縁辺部にある。北東部調査区（A区）はもと元岡B遺跡、南西部調査区（B区）はもと元岡C遺跡としていた範囲にそれぞれ位置する（Fig.2）。いずれも丘陵を樹枝状に浸食する旧谷部であるが、現在は谷部の多くは埋め立てられたり、丘陵部の削平が進み、丘陵尾根部と谷部の高低差は顕著ではなくなっている。調査地点の現標高は、A区が14.0m前後、B区が10.4m前後を測る。周囲では、福岡市志摩線道路の拡幅工事区间の一部に隣接する第39次調査において弥生時代中期後半を前後する多量の土器を出土した土器窓造構が検出されている（「福岡市埋蔵文化財年報」Vol.19）。また第46次調査B区とは道路を挟んだ北側の第42次調査では、旧谷部に弥生時代中期～後期、古墳時代前期までの膨大な量の土器群や青銅器などの祭祀遺物などを廃棄した自然流路が検出されている（木下博文2006「元岡桑原遺跡群第42次調査について」「日韓新時代の考古学」九州考古学会・嶺南考古学会第7回合同考古学大会）。この42次調査で出土した弥生時代終末期から古墳時代前期前半の土器群の一部には、朝鮮半島の土器に一般的だが当時の日本列島にはほとんど認められない格子目タタキ調整を施した在来器形（器台・支脚・大型が多く、壺・甕もあり）のものが数多く含まれている点が特筆される。また小鋼鐸、鎌先、鋼鐵、貨泉などの青銅製品の出土が目立つことから、首長層の祭祀に関連する可能性があり、近隣に当地域の有力な集落が存在することが考えられるようになった。46次も含めこれらの調査地点は元岡・桑原遺跡群の立地する丘陵の南西縁辺の尾根部先端ないし丘陵裾の谷部に立地し、当時（弥生時代～古代）は深く渾入していた古今津湾の旧海岸線まで100m程度の場所にあったと想定される。

元岡・桑原遺跡群は、九州大学統合移転事業に伴って発見され、周知の埋蔵文化財包蔵地とした遺跡群である。この範囲内には事業前にもいくつかの遺跡が認められていたが、移転事業に伴う事前の踏査や試掘確認調査により、それまで未発見であった多くの遺跡や古墳が新たに発見されたため、それらをまとめて一つの遺跡群とすることがより適切であると判断されたものである。遺跡群は、旧石器時代から近世にわたる複合遺跡である。縄文時代から中世にかけての集落遺構、古代の官衙関連遺構、製鉄・鍛冶等の生産関連遺構、70基以上の後期群集墳や7基の前方後円墳をはじめとする古墳時代の首長墓系列等が認められ、本地域の歴史を考察する上で非常に重要な各時代の調査成果が得られている。周辺地域はこれまで、都市化による開発の影響が少なく、開発を原因とする緊急調査の例が少なかった。逆に言えば残存状況が良好なものも少なくない。しかし周囲では近年になって開発の波

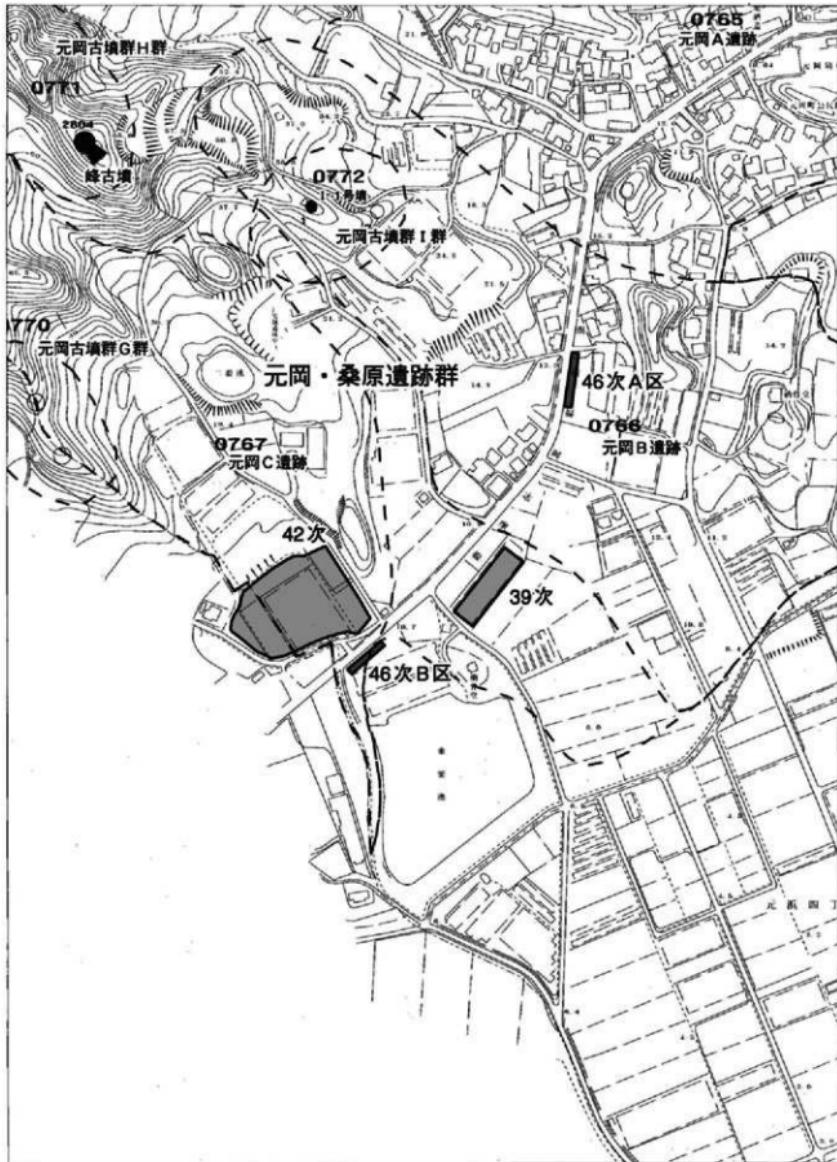


Fig.2 46次調査地点の位置 (S=1/4,000)

が及びつつあり、事前の調査が行われ、遺跡の状況が判明しつつある。以下、元岡・桑原遺跡群の調査成果をまじえ周辺の歴史的環境について触れるが、紙幅の都合から詳細を述べることができない。そのため縄文時代から古墳時代についての詳細は、九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書のシリーズの該当箇所をご参照頂きたい。特に、弥生時代から古墳時代については「元岡・桑原遺跡群6」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集)に詳しくまとめたのでそちらをご覧頂きたい。

古墳時代には、元岡・桑原遺跡群の丘陵には少なくとも6基の前方後円墳(推定築造順で前期の塩除→元岡E-1号→元岡池ノ浦・桑原金屎および時期詳細不明の峰、後期に石ヶ原)や中期前半の大型円墳の経塚古墳があり、南西側に連なる泊丘陵(前原市)の2基の前方後円墳(御道具山、泊大塚)や神仙騎獣鏡2面を出土したという前期初頭の泊大日古墳とともにこの地域の首長墓系列をなす。群集墳には中期に造営が開始される桑原石ヶ元古墳群をはじめ、計70基以上の古墳が分布している。丘陵の造成や石材抜き取りで遺存状況が悪い古墳が多いが、遺存が良好な古墳には金銅装環頭大刀、多数の馬具を副葬するような有力者の古墳もある。また陶質土器や金製耳環などの朝鮮半島系遺物の存在や、鍛冶工具がセットで副葬される古墳があるように、7世紀の木簡で「韓鐵」(7次調査)とある朝鮮半島系の鍛冶集団がこの地の集団内にすでに存在した可能性がある。群集墳の造営期間は7世紀前半に及び、また追想や墓前祭祀を含む経営期間は、7世紀末まではもとより8世紀代にも及んでいる。古墳群周辺の7世紀以降の製鉄・鍛冶関係遺構の展開は、律令期まで含むこの地の製鉄・鍛冶に関わる階層が古墳群の経営にも関係していたと推測されよう。

飛鳥時代(7世紀)には、推古朝に来目皇子が率いたという対新羅征討軍がこの地域に駐屯したことを日本書紀が記す(602年)。8世紀半ば(奈良時代)には糸島地域は怡土城の兼造が行われるなど、外交や国防の最前線として重要な地域となった。元岡・



Ph.1 A-1区調査状況（南から）



Ph.2 A-2区作業風景（南から）

桑原地区の調査では6世紀末以降は多くの谷部の調査で飛鳥～奈良時代に続く遺構群を検出し、製鉄や鍛冶を管理する公的施設を含む可能性が高い。12次調査の大規模な製鉄遺構群（8世紀）、7・18次調査の飛鳥～奈良時代の鍛冶炉や製鉄炉を伴う建物群などは対外的緊張の時代背景が関連するだろ

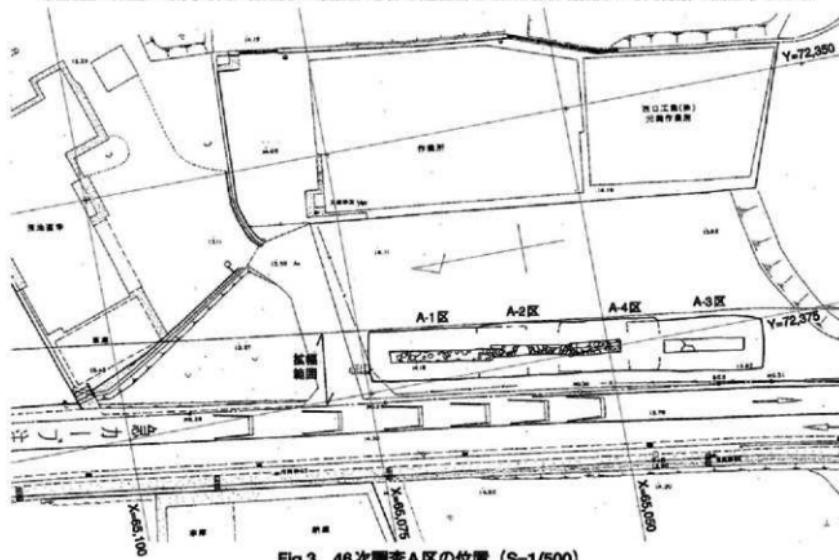


Fig.3 46次調査A区の位置 (S=1/500)

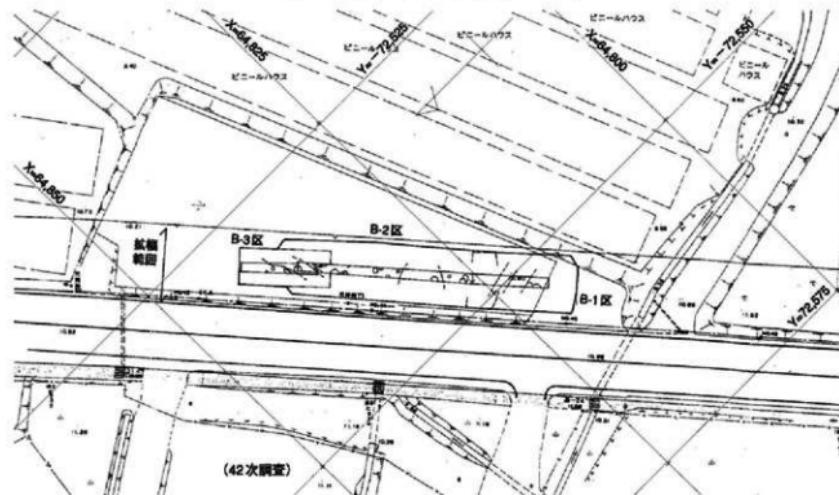


Fig.4 46次調査B区の位置 (S=1/500)

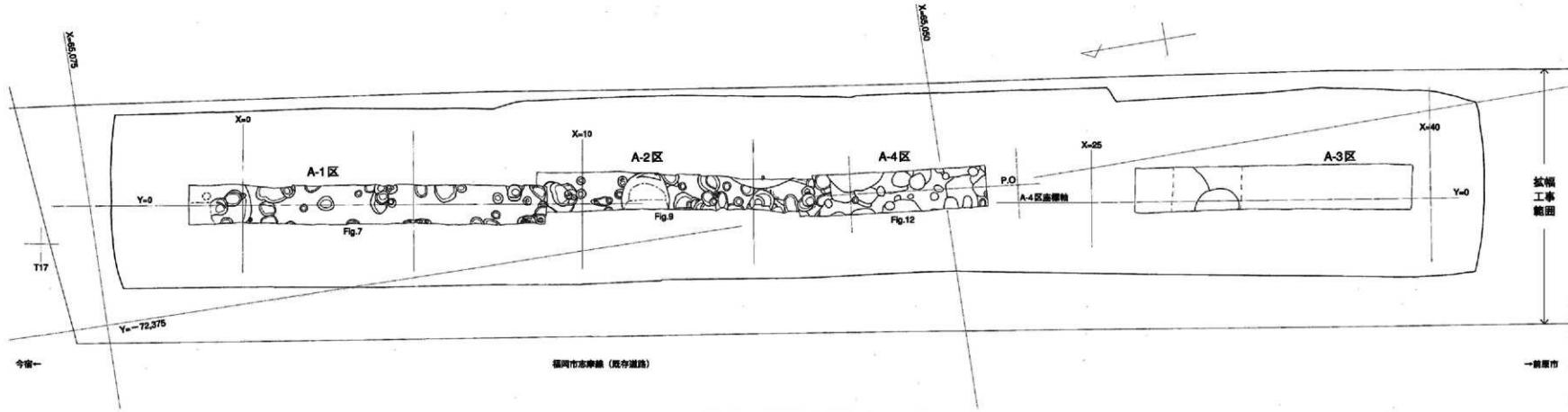


Fig.5 元岡・桑原46次調査A区全体図 (S=1/100)

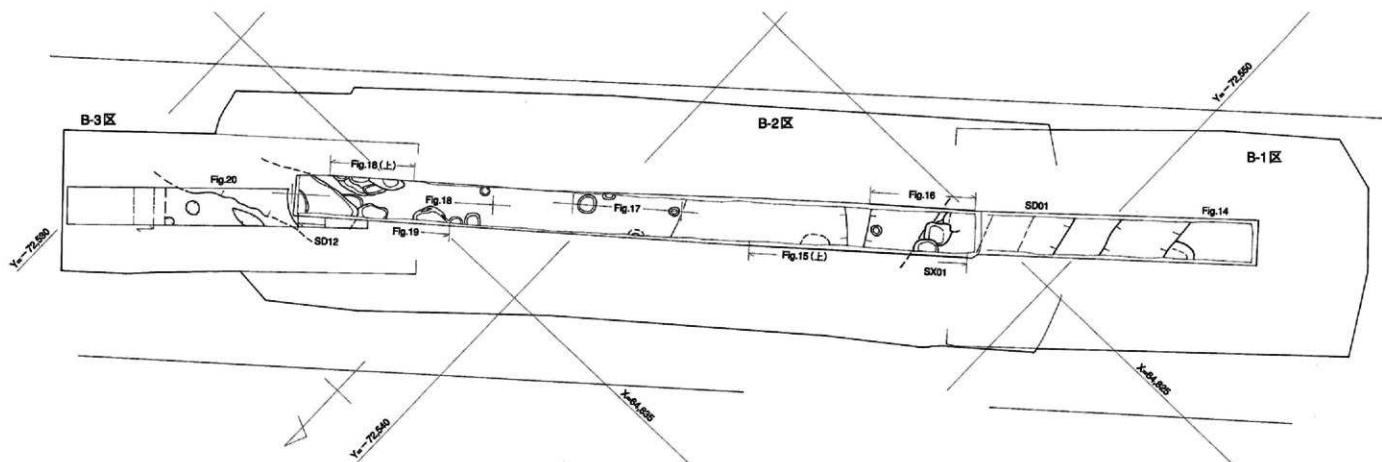


Fig.6 元岡・桑原46次B区全体図 (S=1/100)

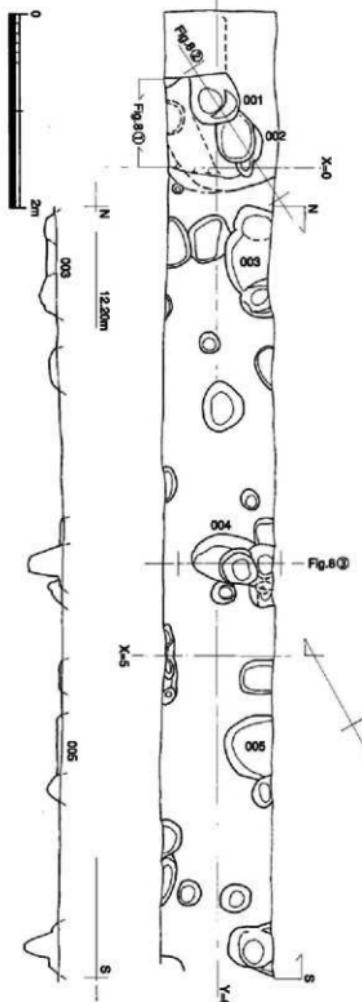


Fig.7 A-1区平面図, 西側断面図 (S=1/50)

う。7次調査では「韓鐵」「嶋里」と記された「壬辰年」(692年?)の木簡が出土した。權や帶金具、印、墨書土器、木簡の各調査地点からの出土は官衙的様相を示し、元岡・桑原地区には大規模な官営製鉄工房群があったとみてよい。この地域は海岸で良好な砂鉄が得られ、他にも製鉄・鋳造遺跡と共に伴う集落遺跡が多い。志摩町の八熊遺跡でも奈良時代の製鉄炉を集中して検出し、官営製鉄工房群の一部であろう。

古代では当該地域は志麻(嶋)郡に属する。正倉院に現存する大宝二年(702年)の「大領肥君猪手」以下の筈前国嶋郡川邊里戸籍があるが、遺跡との対応関係については、「和名抄」記載の古代の郷の比定も含めて、今後の課題である。古代の志麻郡の郷は、韓良・久米・登志・明敷・鶏永・川邊・志麻があるが、このうち韓良・久米・鶏永は現在の唐泊・久米・芥屋への比定で諸説が一致している。登志は登志神社のある今津付近とするのが有力だが確定しない。当事業地付近については、志麻郷とする説と川邊郷とする説があり、川邊郷は志摩町馬場付近とする説も有力である。川邊里に「大領」が居住したなら相当する居館の発見が待たれるが、志麻郡では郡衙も不明である。地名考証のみならず、地域周辺の調査研究、出土木簡や古代の遺構の分析が必要であろう。

中世の遺構は元岡・桑原遺跡群の従来の調査では比較的少なく、4・21次などで検出されている。しかし中世創建を伝える寺社がいくつかあり、元岡・桑原の中世集落は、発掘調査が及んでいない現集落の位置と重なる可能性が高い。46次調査では限られた調査面積ながら濃密な中世遺構を検出したが、これも現在の集落域の一部である。遺跡群の東側の丘陵には水崎城があり、15世紀以降に志摩郡を支配した大友氏の出城として文献資料に登場する。その後、近世に至り、古今津湾の名残である干涸は干拓が進み、現在の景観となった。

II. 発掘調査の記録

1. 調査の概要と経過

道路拡幅工事範囲が調査範囲であり、調査区は東西2地点に分かれる(Fig.2)。東側のA区は210.27m²、西側のB区が192.84m²を調査した(Fig.3・4)。調査原因の性質上、調査区は細長く、かつ



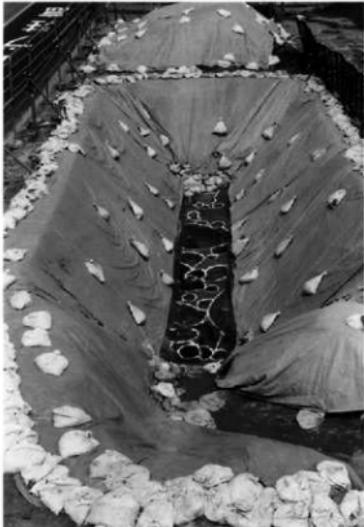
Fig.8 A-1区土層図・断面図①～③ (S=1/50)

遺構検出面が現地表から深かったことにより、調査区下端の幅は1m前後となり、安全性の問題から遺構を十分に調査できた範囲は限られたものになった。またA区は4小区に、B区は3小区に分けて反転調査した。A区ではGL-230cm以下で遺物包含層（中世）、井戸、土坑多数、柱穴多数を検出した。A区の西側では2面の遺構面となり、遺構・遺物も西側に向かって多くなる。中世の遺構が主体であるが、一部は古代、わざかに弥生時代がある。B区ではGL-170cm以下で遺物包含層（弥生時代～中世）、旧河道落ち込み（北側隣接地42次調査の弥生土器大量発見谷部の延長）、土坑・柱穴群（主に弥生時代）、溝（時期不明）を検出した。

包含層や各遺構から、弥生土器、古墳時代～古代の土師器・須恵器、中世の土師器・須恵器・輸入陶磁器、石器（弥生時代）、石製品が出土した。総量パンケース4箱である。

調査区が狭小であるなど調査に制約があったが、遺跡群南西縁辺部の旧谷部における遺構群を確認することができた。特にA区の中世前半の遺構は濃密であり、集落遺構の広がりが考えられる。またB区では丘陵裾部低地における弥生時代土坑群が確認され、周囲の遺構群との関係性が注目される。

発掘調査は2005年8月8日の機材搬入から開始した。8月9日から調査地点の地境にフェンスを設置した。8月10日よりA地点（以下、A区とする）について重機による遺構検出面までの表土除去を東側（A-1区）から行い、調査を開始した。A区は調査区が狭小なため、廃土処理の都合から敷地を4小調査区に分割し、廃土を3回反転して調査を行った。A区の東側には空地があったが、廃土置場としての利用は必ずしも同意が得られておらず、重機の移動など必要最小限の利用しかできず、調査対象範囲を一度に調査できなかった。また遺構面が地表から深く、表土が崩れやすい近年の盛土であり、掘削法面は緩い斜面にする必要があったため、遺構検出面の調査幅は1m前後となった。A区北側のA-1区をA区北半分の2小調査区（A-1・2区）については調査幅内の遺構をほぼ完掘したが、南半分の2小区（A-3・4区）は遺構検出面が深くなり遺構の掘削は危険と判断したので、部分的に遺構を確認し



Ph.3 A-2区調査状況 (南から)

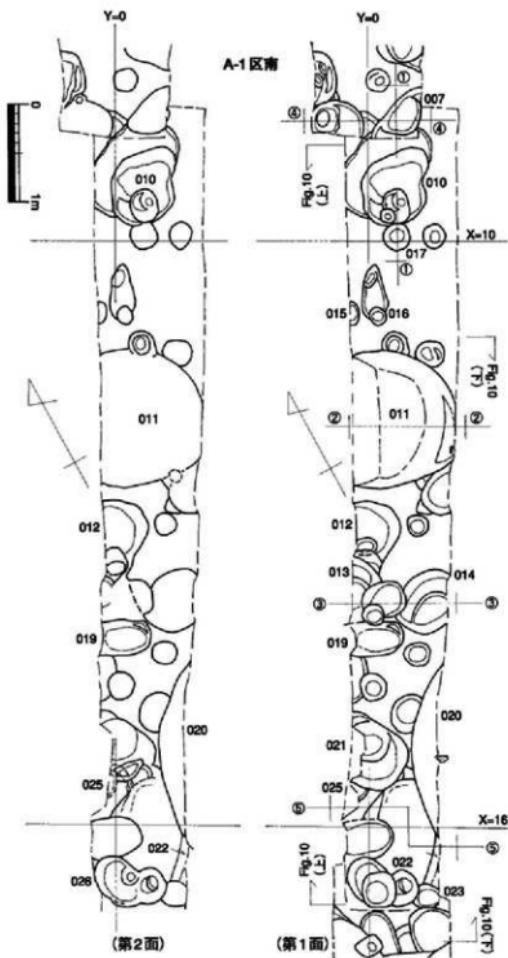


Fig.9 A-2区平面図 (S=1/50)

やすく、休憩や水分補給など十分注意したが、軽い症状で済んだものの熱中症に陥る者も出てしまった。また雨天時には堆水がひどく、排水と造構面の復旧に手間がかかった。さらに細長い調査区であるため、反転作業に多くの時間を要した。造構掘削面が深く、道路に接しているため、安全対策のためフェンスの設営もしっかりしなくてはならなかった。これらのため、調査面積の割に長い調査期間がかかるのはやむを得ないことであった。

たり（A-3区）、造構確認後上層のみ掘削して調査を終了（A-4区）などとしている。A-3区は、包含層の調査も掘削が危険であったため、重機で土砂を上げてから遺物を探集している。A-1区は8月23日までに調査を終了した。A-3区は8月24日から8月26日まで調査した。A-2区は8月30日から9月10日まで調査した。9月中旬は夏期休暇等で現場を休止し、9月21日から現場を再開した。A-4区は9月21日から9月24日まで調査した。なおA区の小区名であるが、東側からA-1、A-2、A-3区と3小区に分けて調査する予定であったため最も西側をA-3区としたが、廃土処理の都合上、調査区中央はA-2区のみで調査することができず、A-2区とA-3区の間にさらにA-4区を設定した。そのため統一されていない感があるが、調査時の呼称をそのまま用いている（Fig.5）。

調査は以下のように好条件のものとは言えず、苦労した部分が多い。調査年度の夏は猛暑の上、深い造構掘削面で風通しが悪く、また法面保護のためブルーシートを斜面に張っていたため日光の照り返しが顕著であり、調査作業は過酷な暑さとの戦いであった（Ph.2）。作業員も高齢者や経験の無い学生が主体であったこともあり、このような条件下では疲労し

B区 (Fig.6) の調査は9月27日より開始した。まず南西側のB-1区を9月27日から9月29日まで調査した。造構面が深く、また地山が砂地のため崩落の危険があり、長く調査区を広げておくことを避け、包含層は重機で土砂を上げ遺物を探集し、また造構は上面検出したが掘削はほとんど行わず調査を終了させた。B区は南東側隣接地に耕作中の畑があり、これに影響しないように重機を旋回する必要があり、調査区法面は斜面を形成できず、二段掘りとした (Ph.6)。このため安全性をより十分に考慮した結果、十分な調査ができなかった部分もある。B-2区は9月29日から10月6日まで調査した。B-1区よりも造構面がやや浅くなつたため、この調査区は造構を掘削し精査した。次に北東側のB-3区を10月6日から10月7日まで調査した。この調査区は造構の確認と一部掘削を行つた。試掘調査成果から、これより北東側は造構が無くなるとされていたため、調査期間もあり、これで実質的な調査を終了した。そして10月11日に機材を撤収し、調査を終了した。

調査中は周辺の地元の方々の理解を得ることができ、円滑な調査の進行を行うことができた。また、九州大学予定地内調査を行う大規模事業担当課の方々には、調査開始時の発掘機材の借置や不足していた機材の提供、機材移動用車両の利用など様々な便宜や協力を図って頂いた。また調査に関してのご教示も得た。記して感謝の意を表す次第である。

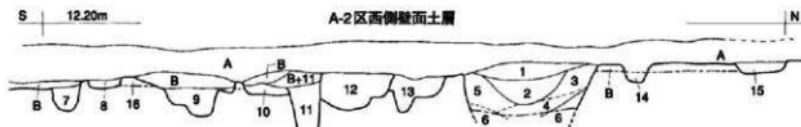
なお資料の整理と報告書作成は平成18年度に行った。

2. A区の検出造構 (Fig.5)

1) A-1区 (Fig.7・8, Ph.1, PL1-1~5)

A-1区はA区のうち北側の調査区である。調査区上面のGLは14.1~14.2mである。GL-240cm前後（標高11.8m前後）の黄褐色砂質土（シルト）層上面で造構を検出した。

造構の覆土は暗褐色土からぶい褐色土で、地山の黄褐色土ブロックを含む場合がある。造構は大小の柱穴群と土坑を数基検出した。造構密度はやや多く、南側 (Fig.9上) はさらに多くなる。造構001・002 (Fig.7上、Fig.8-①) は柱穴であろう。土坑はSK003・004・005がある (Fig.7左の断面図とFig.8-③参照)。いずれも比較的浅く、造構面は削平を受けている。SK005からは白磁片が出土



A-2区西側壁面土層
A. 暗褐色シルト、シルト質、灰・褐色土
B. にぶい褐色土+褐色土又はやや明るい褐色
(新褐色土鉄)、灰・褐色偏灰、半干燥質
シルト)
1. bD層、暗褐色土
2. 暗褐色+褐色土
3・4. 褐色土
5. 敷石 (新褐色) 土+褐色土
6. 褐色土
7. 喬褐色土
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土+褐色土
10・11. 褐色土+褐色土
12. 喬褐色土+褐色土、土質偏灰
13. にぶい褐色+褐色土+褐色土+微炭化褐色
14. 喬褐色土
15. にぶい褐色+褐色土



Fig.10 A-2区西側 (上)・東側 (下) 土層図、断面図 (S=1/50)

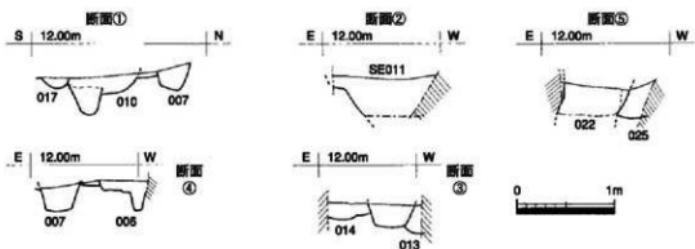


Fig.11 A-2区断面図①～⑤ (S=1/50)

するなど、総じて中世前期を中心とする遺構群と考えられるが、遺物の出土はいずれも細片で少量であり、詳細な時期を明らかにすることができない。

2) A-2区 (Fig.9～11, Ph.3, PL2-6～10)

A-2区はA-1区の南側に接する調査区であり、またA-2区の南側はA-4区に接する。調査区上面のGLは14.1m前後である。GL-210cm(標高12.00m)前後で若干の遺物を包含する暗褐色シルト層となり(Fig.10-A層)、これを下げる標高11.50～11.70m前後で明橙褐色土～黄褐色土の地山上面となり遺構が検出できる。遺構面は北が高く、南に向かって低くなる。ただし地山上面の上にはぶい橙褐色土(十明褐色土)の遺物包含層が薄く堆積し(Fig.10-B層)、この上から掘り込まれたと考えられる遺構と地山上面検出の遺構がある。前者を第1面(Fig.9右)、後者を第2面(Fig.9左)としたが、調査は地山上面まで下げて実施した。

遺構の覆土は包含層のA・B層に近いか、地山のブロックが含まれる。遺構は大小の柱穴群と土坑数基、井戸と考えられる大型土坑2基を検出した。遺構は全体的に密度が高く、南側は特に濃密な分布で遺構の重複が激しくなる。

Fig.9の遺構番号を付したものうち、北から007・017・015・016・019・023などは柱穴であろう(断面はFig.10、Fig.11-①・④を参照)。019などはやや深い柱穴となる。土坑はSK010・012・014・021・025・022・026などがある。これらの中には調査区が狭小なため全体のプランが把握できなかったものもある。SK010は70×90cmの不整形土坑で、周囲の浅い落ち込みとの重複関係が不明瞭なまま掘削している(Fig.11-①)。SK012は径70cmの円形土坑だが、下部の掘り込みから柱穴の可能性がある(断面はFig.10上-13層)。SK014は径70×60cmの椭円形土坑(断面はFig.11-③)。SK021は径70cm以上の不整円



Ph.4 A-3区トレーンチ掘削状況 (南東から)
(※標尺は3m長)



Ph.5 A-3区トレーンチ断面確認状況 (東から)

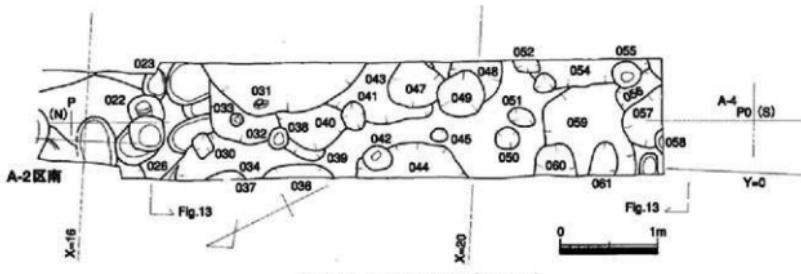


Fig.12 A-4区平面図 (S=1/50)

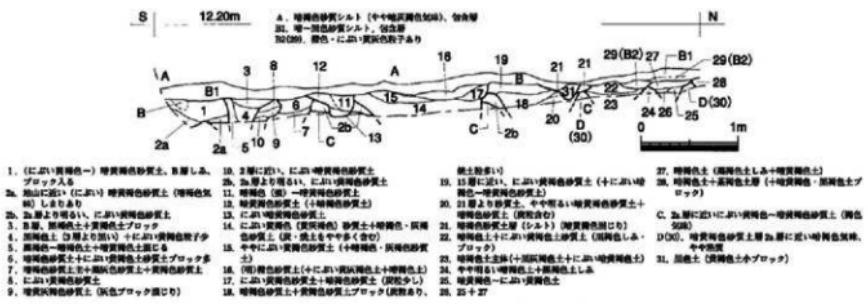


Fig.13 A-4区東側土層断面図 (S=1/50)

形土坑で、2段掘りでやや大型の柱穴の可能性もある (Fig.10上-⑨層)。SK022は周囲の遺構に切られプランが不明確であるが、南北110cm×東西90cm前後の楕円形土坑である。東側の壁面がオーバーハングし、掘り方が深くなるため掘削を途中で断念したが、井戸遺構の可能性もある (断面はFig.11-⑤)。

大型土坑011はA-2区中央にある径140cmの掘り込みで、掘り方が深くなることから掘削を途中で断念したが、土層 (Fig.10上-1~6層) や遺構の大きさから井戸遺構の可能性が高い。同様に大型土坑020は調査区壁にあり、掘削を上部のみで断念したが、径が180cm以上となり井戸遺構の可能性が高い。020からは13~14世紀頃と考えられる土師器の环が出土している。

遺物の出土は比較的少量で、全く出土しない遺構も少なくなかった (出土遺物の無い遺構には遺構番号を付していないものがある)。包含層や遺構から主に中世の土師器、陶磁器の破片や滑石製石鍋の破片が出土したが、一部に弥生土器片、近世陶器の破片がある。遺物はいずれもほとんどが小片で、遺構の時期は詳細に比定できないが、遺構の主要な時期は中世とみられ、第2面遺構のごく一部に弥生時代がある可能性がある。

3) A-3区 (Fig.5, Ph.4・5)

A-3区はA区南側に設定した調査区である。調査区上面のGLは13.8~13.9m前後である。包含層の検出レベルが深く、実質的な調査範囲は調査区北側の一部のきわめて狭いものとなった。GL-215~225cm前後で黄褐色土盛土層から下のにぶい黄褐色～暗黃灰褐色土層となり、遺物を少量含む。こ

のにぶい黄褐色土層は北が高く南に傾斜して低くなる。次に北側ではGL-220cm、南側は低く傾斜してGL-260cmで暗褐色土包含層となる。包含層の遺物はやや多く、これはA-2区のA層、A-4区のB層に相当する。暗褐色土層の下面是水平に近くなり(GL-290cm、標高11.00m前後)、この下層はにぶい褐色土包含層となる。これはA-2・4区のB層に相当するが遺物の包含は少ない。この下のGL-310cm前後(標高10.80m前後)で地山の黄褐色砂質土となる。この地山上面で遺構を検出したが、深く作業を行うことが危険なためメモ的な記録のみを行い、掘削はしていない。また包含層は重機で土砂を上げてから土砂中の遺物を探集するという方法を探っている。中世の遺物の他に、古墳時代の土師器や縄文土器片も検出した。A-3区は、遺構密度は濃密と考えられたが、作業の安全性の問題から十分な調査ができなかった。

4) A-4区 (Fig.12・13, PL3-11~14)

A-2区の南側に接する調査区である。調査区上面のGLは14.0~14.1m前後である。北側でGL-240cm、南側でGL-260cm(標高11.65~11.45m)の包含層B層 (Fig.13) 下面で遺構が一部検出できるが(B層はA-2区のA層にほぼ相当)、遺構がきわめて濃密であり、遺構プランが不明瞭な部分が



Ph.6 B-1区トレンチ調査状況(西南から)

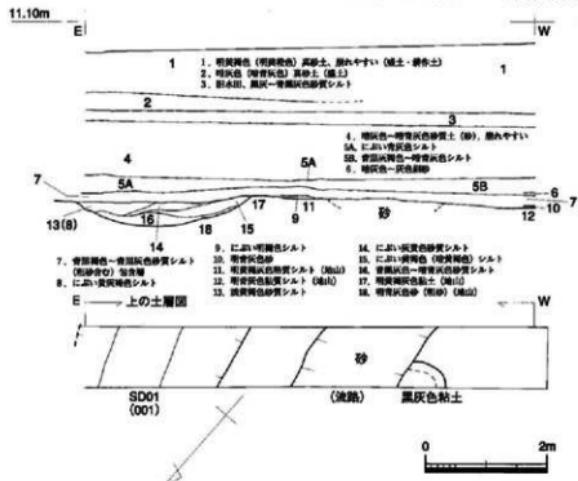
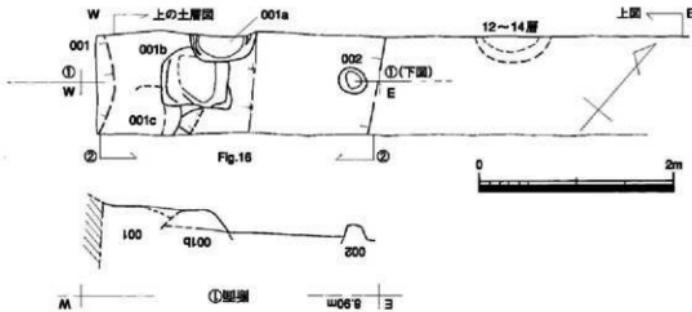
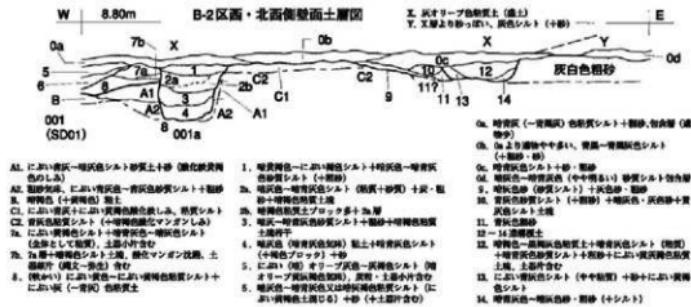


Fig.14 B-1区平面図、南東側土層図 (S=1/80)

多いため、B層下面以下を「包含層」として人力で掘り下げた。この「包含層」はA-2区のB層にはほぼ相当するが、土層観察によれば遺構覆土の集合体である。この「包含層」の下面、地山（Fig.13-C・D層）の上面において遺構を検出し、その平面プランを検出した（Fig.12）。遺構検出面は北側でGL-250cm、南側でGL-285cm（標高11.55～11.20m）であり、北から南へむかって顕著に低くなる。検出した遺構はきわめて濃密である。遺構検出面がすでにかなり深く、これ以下の遺構を掘削することは安全性から問題があるため、遺構の上面数cm～10cm程度のみを掘り下げ、以下の掘削を断念した。

検出した遺構には、土坑（径50cm以上を仮に「土坑」とするが柱穴を含む可能性がある）16基（SK032・031・036・039・040・043・047・049・048・044・054・059・056・057ほか北側の番号無しの2基）、柱穴多数がある。これらのうちSK031は掘削していないが、径の大きさ（170cm以上）から井戸遺構の可能性もある。

遺物は、「包含層」からやや多く出土した。遺構は上層の一部しか掘削していないので、遺物の出土は少量で、出土遺物がないものもある（出土遺物がないものは遺構番号を付していない）。遺物の大部分は、包含層および遺構出土とともに古代末ないし中世初期（11世紀）から中世前期（13～14世紀前半）までのものである。SK031からは褐釉陶器と糸切り底の土師器環が出土している。SP033からはヘラ切り底の土師器環が出土した。このように遺構の大部分も遺物の主要な時期幅におさまるが、



SK048からは弥生時代中期の甕が出土するなど、ごく一部に弥生時代の遺構がある可能性がある。

なおA-3区とA-4区の間に未調査部分が生じてしまったが、これはA-3区に向かって（南に向かって）包含層および遺構面がきわめて深くなり、安全性の問題から十分な調査ができないことが判明していたことと、廃土処理の困難さに由来する度重なる反転掘削作業により調査期間が圧迫されつつあったため、この部分の調査を断念したものである。

3. B区の検出遺構 (Fig.6)

1) B-1区

(Fig.14, Ph.6, PL.3-15, PL.4-16)

B区の南西側の調査区である。調査区上面のGLは10.60~10.80mである。GL-230~250cmで青黒灰色~青黒褐色シルトの包含層 (Fig.14-7層) となる。この包含層は下面の地山面で検出された旧河道の遺存状況からは削平後の堆積とみられる。包含層の下、GL-250~270cm (標高では8.10m前後と一定) で明黄褐色~明青灰色シルトの地山となり遺構を検出した。遺構面が深く、「調査の概要と経過」で述べたように遺構はほとんど上面確認にとどめ、一部しか掘削していない。砂層の堆積から旧河道と考えられるSD01は重機で掘り下げている。

SD01は調査区内だけでは流れの方向は不明だが、周囲の地形を考えると隣接する42次調査における弥生時代から古墳時代前期の大量土器廢棄のみられる旧河道の続きの可能性がある。しかし本調査区では遺物の出土はごく僅かであり、そのような状況は無い。またこれ以外に、



Ph.7 B-2区トレーンチ遺構検出状況（南西から）

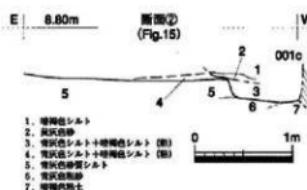


Fig.16 B-2区西・南東側断面図 (S=1/50)

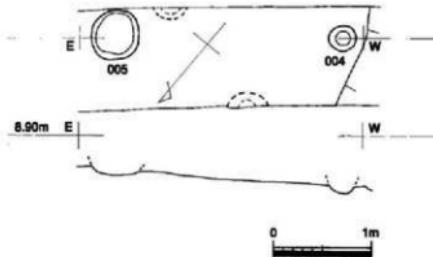


Fig.17 B-2区中央平面図, 南東側断面図 (S=1/50)

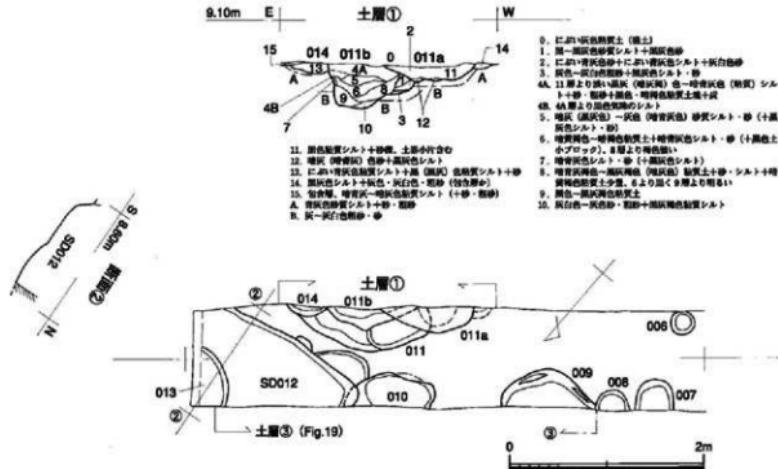


Fig.18 B-2区東平面図, 南東側土層図 (S=1/50)

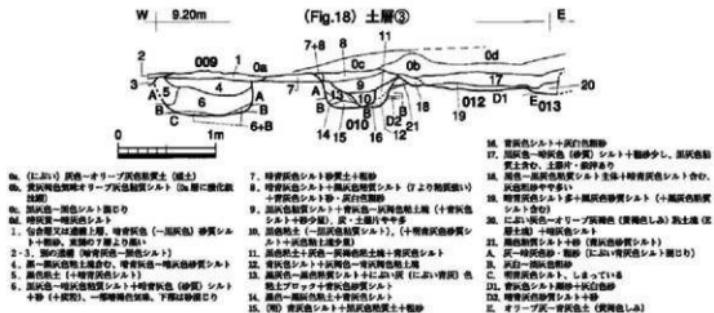


Fig.19 B-2区東・北西側土層図 (S=1/50)

西側にも幅の狭い旧流路跡痕がみられたが、弥生時代の可能性がある黒灰色覆土の遺構を切っており、新しいものと判断した。

遺物は、遺構検出面（地山上面）の上に堆積した包含層から主に出土した。8世紀（奈良時代）の須恵器・土師器が多く、フイゴ羽口もある。包含層の形成はこれらの遺物の示す時期以降であろう。また一部に弥生土器小片もあり、楽浪土器の簡环の可能性のある小片も検出されている。

2) B-2区 (Fig.15~20, Ph.7, PL4-17~22)

B-1区の北東側、B区中央の18m長の調査区である。調査区上面の標高は、南西側で10.80m前後、中央で10.70m前後、北東側で10.60m前後を測る。調査区南西側 (Fig.15・16) では、GL-230cm前後で暗青灰色シルトの包含層となる。この下のGL-240cm前後（標高8.40m前後）で青灰色粘質（～砂

質) シルトまたは一部は灰白色砂の地山上面となり遺構を検出した。B-2区南西端は、B-1区北東側のSD01に続くと思われる落ち込み001 (PL4-17・20) があるが (SD01はこれに包含される)、これを切って隅丸方形気味のそれぞれ径60~70cmの遺構001a・001b・001cがあり、重複している (重機で下げてしまった部分があり一部不明確なプランとなっている)。これらはプランや掘り方から土坑というよりは柱穴とも考えられるが、調査区が限定され建物を復元できない。

調査区中央 (Fig.17) では、西側でGL-230cm、東側でGL-210cm (標高8.40m~8.60m前後) で地山の青灰色砂質シルトとなり、遺構を検出した (PL4-18)。検出遺構は柱穴のみであり削平が著しい。また調査区中央では包含層はあまり無かった。

調査区北東側 (Fig.18・19, PL4-19) では、GL-190cm (標高8.70m) 前後で遺構覆土の上層となるが、西側ではこのレベルでは遺構プランが明瞭ではなく (包含層)、GL-200cm (標高8.60m) 前後で地山の灰色砂となり遺構が検出できる。東側の地山は青灰色シルトとなる。なおこれより上の0層 (Fig.19-0a~0d層) は後世の水田により形成された土層である。また地下水位が高く、遺構の掘り込みの下部からは湧水が認められるものが多い。B-2区北東側では比較的多くの遺構を検出した。土坑 (SK009・010・011) やB-3区に続く溝SD012、柱穴 (006~008など) がある。

これらのうちSK011は土層観察の結果、複数の土坑と柱穴の重複のようである (Fig.18)



Ph.8 B-3区トレーンチ遺構検出状況 (南西から)

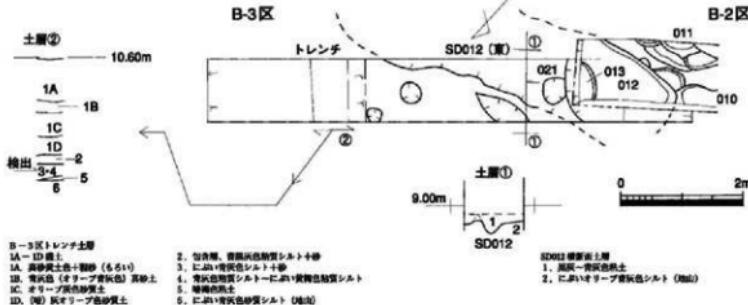


Fig.20 B-3区平面図、土層図 (S=1/80)

一土層①、PL4-22)。SK009は径100cm、深さ40cmの土坑である(Fig.19-4-6層)。SK010も同様の規模の土坑だが、土層観察からは(Fig.19-8-16層)柱穴の可能性もある。SD012はB-3区に続く延長4.8mが確認できた、幅140~150cm前後だが、深さ20cm程度しか遺存しない浅い溝である(PL4-21、Fig.18-断面②)。略東西にのびるが、B-2区の西側で途切れるかもしれない。溝の遺存状況などを見ると、本来の遺構面からはかなり削平されているものと考えられる。なお遺構013は012のやや深くなる部分である。

B-2区では、遺構面直上の包含層(2次の堆積、一部は遺構の上層か)や遺構から弥生土器の破片を主体として出土した。弥生時代中期までとみられる石錐の破片もみられる。また一部に古墳時代の土師器の破片もみられた。遺物の主要な時期から、B-2区で検出した遺構の大部分は弥生時代中期から後期と考えられ、B-1区の包含層遺物から推定して奈良時代以降に削平されたと考えられる。

3) B-3区 (Fig.20, Ph.8, PL4-23)

B-2区の北東に続くB区東側の調査区である。試掘調査の成果から、調査範囲は当初B-2区に相当する範囲までしか予定していなかったが、B-2区東側でむしろ多くの遺構が検出されたため、さらに東側にダメ押し調査として調査区を設定し、遺構を確認したものである。こうした事情であつたから、調査終了と撤収の日時についてすでに関係各位に伝え調整してしまっていたため、この区の調査は必要最小限のものになってしまった。調査区上面のGLは10.60m前後、遺構はGL-160cm前後の青灰色シルト～にぶい黄褐色シルト面で検出できるが、調査区西側ではやや下げたレベル(GL-180cm、標高8.80m前後)で遺構を検出した(Ph.8)。検出した遺構は、溝SD012の続きと、これを上から切る柱穴021など柱穴3、土坑状落ち込み1である。遺構は一部のみ掘削した。SD012の横断面は北側がわずかに深く南側が浅く平坦となる(Fig.20-1土層①, PL4-23)。東に向かって遺構は少なくなるようである。このB-3区より東(北東)側は、試掘調査結果によれば遺構が認められないようであり、遺構分布がここで途切れると判断して調査を終了した。B-3区からは、遺物の出土は弥生土器小片などがごくわずかであった。

4. 出土遺物 (Fig.21~23, Ph.9)

元岡46次調査全体ではおよそそパンケース4箱が出土した。遺物の種類の概要は「調査の概要と経過」で述べた通りである(7頁)。出土遺物はほとんどが破片であり、小片が多いが、限られた調査の中で遺跡の時期幅や遺構の時期を知るには貴重な情報源であり、遺構出土および包含層出土とともに、復元が可能なものの大部分を実測し図示した。なお出土した調査区、遺構、層位については挿図中に記した。一部の遺物は写真を掲載した(Ph.9)。以下、調査区ごとに出土遺物について記述する。

1) A区出土遺物 (Fig.21-1~24, Fig.22-1, Fig.23-4・6)

(Fig.21) 1は白磁碗IV-1a類の底部。なお中世の輸入陶磁器の分類と編年は大宰府分類による(太宰府市教育委員会2000「大宰府条坊跡Ⅴ」太宰府市の文化財第49集)。

2・3は弥生時代中期の甕の口縁部。2はA-2区南半包含層出土。須玖I式の甕の口縁部。にぶい橙色。頸部下の三角突帯は低くシャープではない。3も須玖I式の甕の口縁部。橙色。2・3ともに石英・長石や雲母粒を多く含む胎土。A区は中世が多いが、弥生時代の遺構も一部あると思われる。

4は高取系の近世陶器で頸部に布袋の塑像がある德利。無釉の一次焼成のみ。にぶい橙色。18世紀中頃以降。A-2区南半包含層出土。包含層の形成は近世に下ることを示すか。内面ロクロナデ。5

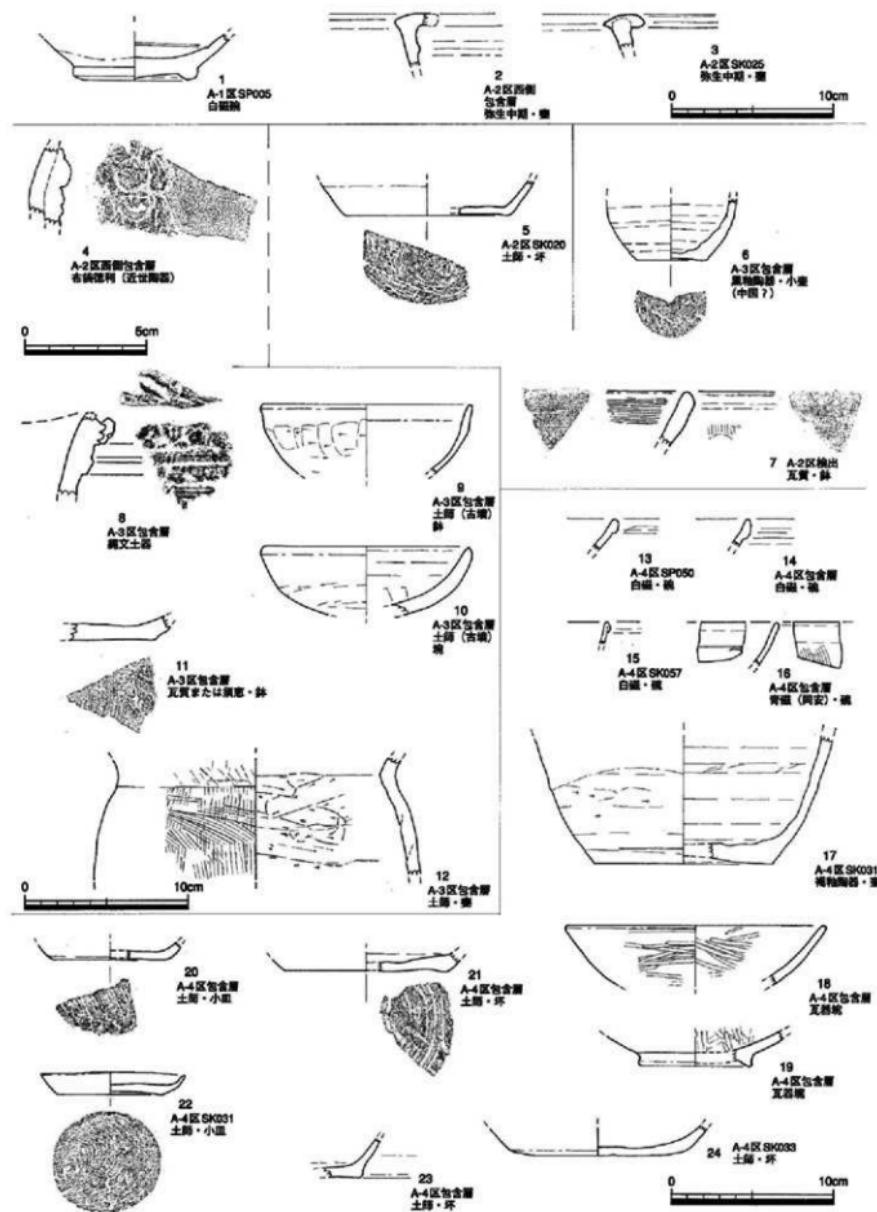


Fig.21 元网·桑原46次出土遗物实测图 (1) (S=1/3, 1/2)

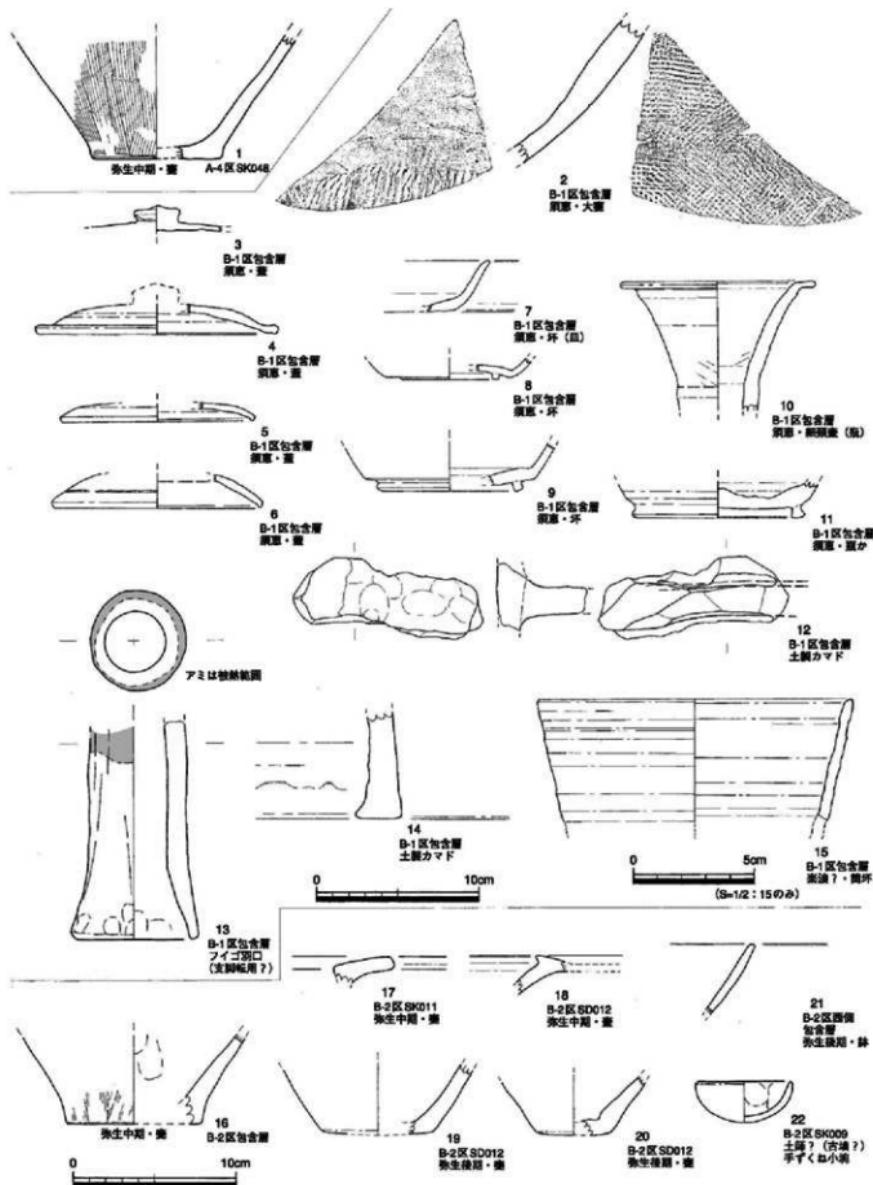


Fig.22 元岡・桑原46次出土遺物実測図(2) (S=1/3, 1/2)

は土師器の坏。回転ナデ調整。底部回転糸切り。にぶい赤褐色。14世紀前後か（以下、中世の土師器坏・小皿の編年は、山本信夫1990「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『乙益重隆先生古希記念論文集』を参考とする）。6は一見須恵器質にもみえる焼成だが、黒釉陶器の小型壺または小型瓶の体部下半～底部。内外面ともにロクロ水挽きの回転ナデ、内面の凹凸が顕著。底部は回転糸切り→板目压痕。外面には灰かぶりがあるが内面には認められない。中国産陶器であろう（田中克子氏教示）。7は中世後半の瓦質土器鉢の口縁部。小片で復元できない。外面はハケメ→ナデ、内面はヨコハケ。褐灰色～灰白色、断面は黒色。

8は繩文土器の口縁部小片。口縁端部上面をわずかに欠損。口縁部端部外面が肥厚し（一部瘤状）、右上ナメほかの刻み目を施す。口縁部下はヘラ状工具による広い沈線をヨコに施す。器面には原体不明の擦痕によるナデ調整がある。内面はナデ。外面は黒褐色～にぶい褐色、内面は橙色。繩文時代後期中葉から後葉（鎌崎式～北久根山式前後）との教示を受けた。包含層出土で二次的な流入である。

9は古墳時代の土師器の椀状の鉢。丸底であろう。外面はヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面はナデ。橙色。精製胎土ではなく砂粒や雲母粒を多く含む。古墳時代前期後半～中期か。10は古墳時代の椀形の鉢。丸底と予想される。器壁が厚い。外面は板ナデ→ナデ。内面は、底部付近は瘤状に板ナデをヨコに施した痕跡があり、ナデ仕上げとする。器壁の厚さや器形から古墳時代でも新しいもの（中期～後期）とも考えたが、内面調整の特徴からは前期の可能性もあり時期を限定できない。明赤褐色。

11は焼成が甘い中世須恵器または中世後期の瓦質土器の鉢の底部。ナデ調整。底部は回転糸切り。にぶい褐色～明褐灰色。12は土師器の甕。やや長胴の器形だろう。外面はハケメ（口縁部は雜なヨコナデ）、内面は、胴部はヘラケズリ（口縁部はナデ）。内面のケズリの器面は粗く平滑ではない。頸部内面にケズリによる稜が形成される。胎土には粗砂粒や雲母粒を多く含む。6～7世紀頃か。

13は白磁碗IV類の口縁部。14も白磁碗IV類の口縁部。15は小片で傾きにやや難があるが白磁碗II～I類の口縁部だろう。小さな玉縁口縁をなす。13～15は陶磁器編年では11世紀後半から12世紀前半を主体とする。16は同安窯系青磁碗Ib類。12世紀中頃か。17是中国産の褐釉陶器の壺。体部下部途中以下は施釉しない。釉は暗オリーブ色～オリーブ黒色、胎土は黄灰色。外面はヘラケズリ→回転ナデ、底部近くに工具による回転ナデに起因する沈線状痕がある。内面は水挽き成形痕跡→回転ナデ。底部は上底気味、周縁が回転ナデ、中央は未調整か。12～13世紀か。22の土師器小皿と共に共存した。

18は瓦器楕の坏部。口縁部は丸くおさめる。内外面へラミガキ。炭素吸着不十分で、暗褐灰色の器面以外ににぶい黄褐色の部分がある。19は瓦器楕の底部。外面は摩滅するが、内面はヘラミガキが残る。灰白色～褐灰色、断面は黒色。高台が低く、断面小台形状で、11世紀後半～13世紀台の新しい様相。20は土師器の小皿。底部回転糸切り→板状压痕。橙色。12世紀後半か。21は土師器の坏。回転ナデ調整、内面は回転ナデ後に雜なナデで仕上げ。底部は回転糸切り→板状压痕。橙色～にぶい褐色。12～13世紀か。22は土師器の小皿。回転ナデ。底部回転糸切り。橙色。口径から13世紀前半頃か。23は土師器の坏。坏aと坏bの中間形態か。回転ナデ。底部回転糸切り。灰褐色。14世紀頃か。24は土師器の坏。摩滅気味だが底部はヘラ切り後未調整とみられる。浅黄褐色。12世紀前半頃か。

(Fig.22) 1は弥生時代中期・須玖II式の甕の底部。外面ハケメ、内面は摩滅し不明だがナデか。褐色。砂礫多く含む。1/4周の遺存率。A区の遺構には弥生時代も一部あるのだろう。

(Fig.23) 4は滑石製石鍋の破片。外面は煤付着。割口にも二次的な工具痕があり、破片を転用しようとしたが失敗して廢棄か。内外面ともに器面調整のケズリ痕がよく残る。外面はノミ状工具によるケズリ。内面はケズリ→ミガキ。6も滑石製石鍋の破片。口縁部片。縦長長方形状の瘤状突起(把手)。内外面ともに器面は平滑に仕上げる。突起の形状（木戸雅寿のII類）から11世紀頃か（木戸雅寿1995

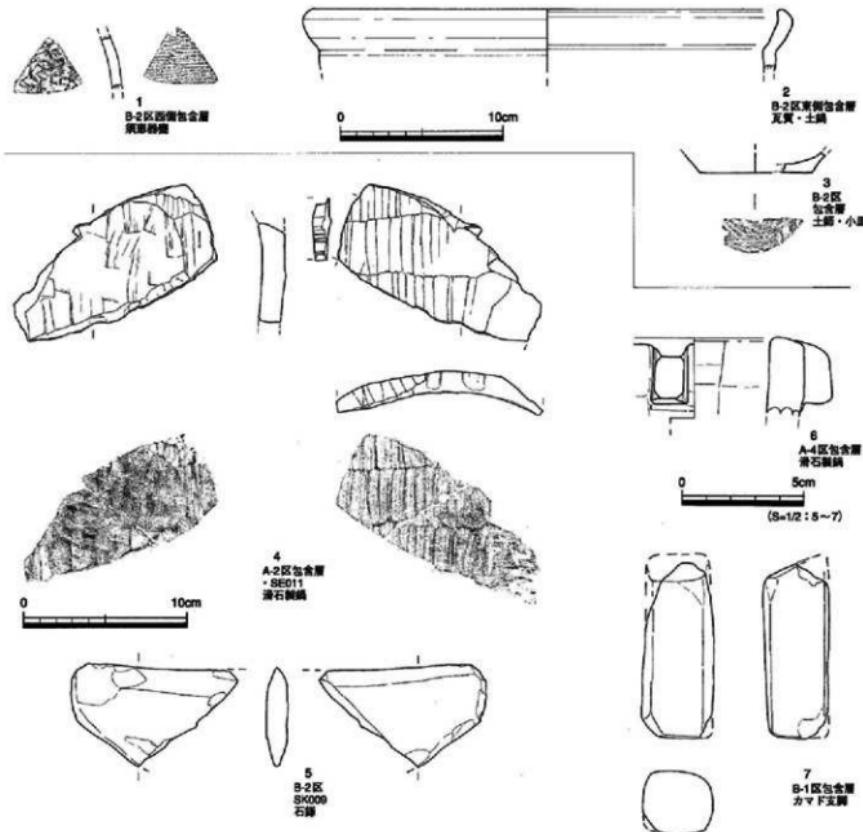


Fig.23 元岡・桑原46次出土遺物実測図(3)(S=1/3, 1/2)

「13.石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社)。

2) B区出土遺物 (Fig.22-2~22, Fig.23-1~3・5・7)

(Fig.22) 2は須恵器の大甕の胴部下部の破片。外面はヨコの平行タキ、底部近くは斜交状にタタキが施される。内面はタテの平行条痕当具で底部付近より上は回転ナデによりナデ消しがされる。外面はオリーブ灰色～青緑灰色、内面は灰白色。奈良時代(8世紀)か。3～6は須恵器の坏蓋。3はつまみ付きの坏蓋。外面(つまみ除く)は回転ヘラ切り→ナデ。内面は回転ナデ→ナデ。青灰色、器壁は灰白色。胎土は精良。4は天井部中央を欠損するがつまみ付きの坏蓋と考えられる。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラ切り→ナデ。内面は回転ナデ→ナデ。口縁部(据端部)上方に重ね焼きの痕跡が一部巡る。天地逆にして坏身の上に重ねたものか。口縁部が屈曲する型式で8世紀後半。青灰色

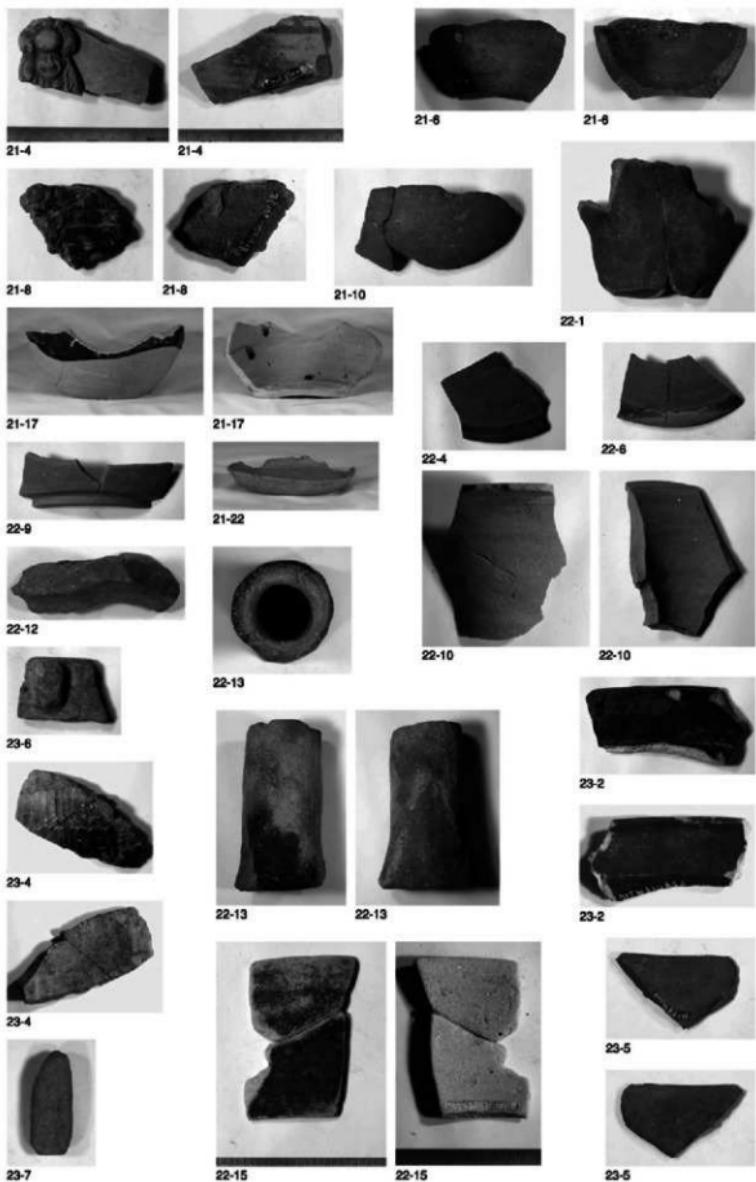
(天井部) ～暗青灰色（口縁部）、器壁断面は灰褐色。胎土は精良。5は天井部を欠損するがつまみが付かない坏身か。回転ナデ、天井部は回転ヘラ切り→ナデ。内面は回転ナデ→ナデ。明緑灰色～オリーブ灰色。胎土は精良。8世紀前半か。6は天井部を欠損するがつまみが付く坏身であろう。内外面回転ナデ。口縁部近くの上方に重ね焼きの剥離痕跡が明瞭に巡る。灰かぶりが内面と口縁端部外面の一部にあり、天地逆にして坏身の上に重ね焼きしたもの。青灰色～暗緑灰色。口縁部形態から8世紀前半か。7～9は須恵器の坏身。いずれも奈良時代（8世紀）の型式。7は高台の付かない皿状の坏。器面が摩滅するが回転ナデであろう。底部は回転ヘラ切り→ナデ。外面は炭素吸着気味で暗緑灰色、他は明緑灰色～明灰色。胎土は精良、砂粒がほとんど無い。焼成が甘く軟質気味。8は高台付坏。内外面回転ナデ。底部が上底状。青灰色～暗灰色。胎土は精良。高台の特徴から8世紀前半か。9は高台付坏。内外面回転ナデ。青灰色～明緑灰色。胎土は精良で砂粒がほとんど無い。8世紀前半～中頃。10は須恵器の長頸瓶（細頸壺）の頸部から口縁部。11は須恵器の瓶の高台付底部。内外面ともに回転ナデ。外面に湿苔痕跡、底部はヘラ切り→ナデ。灰白色。胎土は精良。高台付坏との高台の特徴の比較から8世紀でも後半期のものか。12は土製カマドの焚口部（上辺か）の錐状突帯。突帯は高くしっかりした作り。突帯頂部は欠損。突帯貼付の上下はヨコナデ。内面ナデ。にぶい褐色～にぶい橙色。胎土は密で、砂粒を多く含む。14は土製カマドの据部設置面の破片。外面は器面摩滅、内面はヨコのナデ。粘土帶積上げ痕跡が内面に残る。橙色（外面）～にぶい褐色（内面）。粗い胎土で砂粒を多く含む。12・14ともに8世紀か。包含層中に8世紀代の遺物にまとまりがあることが注目される。

13は土製の轆（フィゴ）羽口である。円筒状だが送風口側（図下）がやや広がる。外面は板ナデ、内面はナデ。すばまる轆（図上）の外面は被熱して変色している。橙色～にぶい赤褐色。器台または支脚を転用したものか。包含層中に多数占める他の土器や、元岡遺跡群における鉄生産関係構造の動向から奈良時代に属するものである可能性が高い。

15は楽浪土器の筒坏の破片と判断した（Ph.9下段中央）。復元は小片のため前後する可能性がある。全体的に灰白色だが、外表面はわずかに青味のある黒灰色を呈する。胎土はきわめて精良で、ごくわずかな微細粒を含むが、いわゆる白色泥質胎土である。外面はロクロによる回転ナデがあり、内面も摩滅し不明瞭だが同様である。はじめ須恵器の摩滅したものが瓦器碗の類と考えていたが、後者としては傾きが全く異なり、胎土も相違し、前者としては胎土が精良に過ぎ、焼成や摩滅度合が異なり、適当な器形がないと考えられた。最近、福岡市内や糸島地方出土の楽浪土器や東京大学所蔵の楽浪土器出土の樂浪土器を資料調査する機会があり、これらとの比較から、胎土やロクロ目などから樂浪土器の破片と認識するに至った。糸島地方では樂浪土器が多く出土しているが（「Ⅲ. 小結」参照）、元岡・桑原遺跡群では初の出土である。

16は弥生時代中期、須玖I式の壺の底部。外面はハケメ痕跡があるが器面が摩滅する。内面はナデ。底部は欠損するが厚い平底であろう。褐灰色～明褐灰色。17は小片で傾きに不安があるが、弥生時代中期の壺の口縁部の可能性が高い。褐褐色～褐灰色。18は弥生時代中期（須玖式）の壺の口縁部小片。丹塗ではない。にぶい橙色。19は弥生時代後期後半（下大隈式）の壺の底部。凸レンズ状の不安定な底部だが平底の名残りがある。器面が摩滅し調整不明。明赤褐色（外面）～明褐灰色（内面）。20は弥生時代後期後半の壺の底部。凸レンズ状底。器面摩滅し調整は不明。橙色。21は弥生時代終末頃の在地系鉢であろう。復元は難しい小片である。器壁はやや薄く丁寧に作られる。器面は摩滅し調整不明。にぶい橙色。22はおそらく古式土師器の小碗で、手づくね成形のミニチュア土器。内面にはユビ压痕が残るが、外面は平滑に仕上げる。橙色。

（Fig.23）1は須恵器の壺の副部小片。外面は平行タタキ→カキメ。内面は亀甲文のような当具痕。



Ph.9 出土遺物写真（縮尺不同）※番号はFig.21～23参照

暗青灰色。胴部が横方向の水平タタキであり奈良時代か。2は中世後期の瓦質土器の鍋（三足鍋か）。小片であり径復元は前後する可能性あり。内外ともにロクロによる回転ナデか。外面に煤付着。内外面ともに器表面は炭素吸着で黒褐色。器壁は灰白色。16世紀頃か。3は土師器の小皿。回転ナデ。底部回転糸切り。にぶい橙色。14～16世紀か。

5は石鎚ないし石包丁。両面とも研磨。両刃状だが、図は天地逆で図の上辺部分が主要な刃部として石鎚とするべきか。緑灰色～青灰色の安山岩製。残存長69mm、残存幅41mm、厚さ9mm。

7はカマドに用いる小型の土製支脚か。断面は隅丸方形状、長い直方体状の土製品。片方の小口面が傾斜する。摩滅し器面調整不詳だがナデ仕上げか。

III. 小結

1. 元岡・桑原遺跡群第46次調査の成果

今回の調査においては、調査区が狭小であり、かつ遺構面が深かったことにより、主に安全上の問題から調査の遂行に制約があった。しかしながら、元岡・桑原遺跡群の南西縁辺部における遺構群のさらなる広がりを確認することができた。以下、調査の成果について簡単にまとめておきたい。

特にA区における中世前半を前後する時期の遺構群は濃密であり、集落遺跡の存在を確認できたことの意義は少なくない。「I.はじめに 3. 調査地点の位置と周辺の歴史的環境」で述べたように、これまでの元岡・桑原遺跡群では、主に九州大学予定地の丘陵部において発掘調査が進み資料が蓄積しているが、弥生時代から古代前期（9世紀頃まで）の遺構と遺物が多いものの、それ以降、特に中世の資料の検出は比較的少なかった。今回の調査において、丘陵裾部やその間の谷部に中世遺構が多く存在していることが明らかになったが、この立地は現在も集落が広がっている地区に重なる。今回は九州大学予定地内の「G区」(Fig.1参照)の南東側（本調査A区の位置）における中世遺構の広がりを確認したが、現在の集落は九大予定地「G区」の東側から「C区」の南側にかけて広がっており(Fig.1)、逆に言えばこれら現在の集落の位置に中世以降の遺構群が集中して存在している可能性が考えられる。今回のA区のように場所によっては、特に後世の削平が少ない谷部では、かなり濃密に遺構が遺存する地点もあることが予想される。九大予定地の丘陵の南側裾部に位置するこれらの現在の集落域は、これまで本調査も試掘調査もほとんどないが、今後九大が本格的に移転することにしたがって周囲の新たな建築・開発行為が多くなることが予想され、埋蔵文化財への影響とそれに対する文化財行政上の保護対策について、多くの遺構があることを想定した上で、十分に留意する必要があろう。

次にB区では、諸条件から十分な調査ができなかった部分が多いが、弥生時代の旧河道と溝、土坑などを検出した。B-1区からB-2区にかけて検出したSD01は、42次調査の大量土器廃棄のある河道（既発表の文献は3頁参照）のうち東側の河道の延長の一部である可能性があるが、本調査では土器の出土はほとんど無く、全く違う様相である。逆に42次調査の大量廃棄の特異性とその意味が際立つと言える。また主にB-2区からは、遺物の出土は少なかったが、弥生時代中期～後期と考えられる溝・土坑・柱穴が検出されており、集落の広がりを示すとともに、42次の大量廃棄を中心とする当時の景観や集落構造の解明が今後の課題となる。本調査地点は、遺物が少ないなどの様相からはおそらく当時の集落域の縁辺部であろうと予想されるが、さらなる実態解明は今後に委ねられる。

また包含層への2次流入と考えられるが、楽浪土器と認識できる土器片が出土した (Fig.22-15)。

| 番号 | 地名 | 遺跡地 | 所在地 | 基準／標記（タキ）／焼成／他 | 出土場所（共存土器） | 番号 | 文獻 | 福岡市管轄 | 他の市管轄 |
|----|------------------------|-----|----------------|---|---|---------------|---------------------|-------------|-----------------------------|
| 1 | 糸島・島原 44 次 | 糸島 | 福岡県糸島市御前原（北岸原） | 糸島／前井田原上平／口部破片／瓦質／ 縦縫目有りが特徴的。土器は、火候良 好品。 | 中部佐世保が遺物较少。42 次 2001 の下 段にあり比較的多く出た事か? | 番号付 F1a-13-13 | 兵佐坂跡 2007 | 福岡市管轄 364 箇 | 福岡市管轄 |
| 2 | 今宿平野 11 次 （古墳群上古の段） | 糸島 | 福岡県糸島市今宿（北岸原） | 糸島／（横縫目）4 口以降ノギ／合口 火候良好品。 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-13 | 中穂台（星野山） | 中穂台（星野山） | 福岡市管轄 |
| 3 | コノリ 2 次 性急 | 糸島 | 福岡県糸島市中津原（早見原） | 糸島／？（横縫目）／瓦質／片口／ 白陶土質、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-14 | 后醍醐町 2002、 寺崎浜民家 | 后醍醐町 728 箇 | 福岡市管轄 |
| 4 | 比恵 18 次 P-164 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／片口／ 白陶土質、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-15 | 比恵町 1990、 寺崎浜民家 | 比恵町 227 箇 | 福岡市管轄 |
| 5 | 比恵 20 次 SP5002 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／片口／ 白陶土質、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-16 | 比恵町 1994、 寺崎浜民家 | 比恵町 481 箇 | 福岡市管轄 |
| 6 | 比恵 21 次 SP5102 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／片口／瓦質 火候良好、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-17 | 比恵町 1994、 寺崎浜民家 | 比恵町 482 箇 | 1.8 倍 （古墳群解説 古墳群解説） |
| 7 | 比恵 21 次 七毛塚中層 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／白陶土質 火候良好、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-20 | 七毛塚 2004a | 福岡市管轄 380 箇 | 古墳群解説 (A 項) |
| 8 | 比恵 21 次 2011 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／白陶土質 火候良好、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-21 | 七毛塚 2004b | 福岡市管轄 380 箇 | 古墳群解説 (A 項) |
| 9 | 比恵 21 次 何處出土 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／片口／ 白陶土質、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-22 | 山口駒塚 1992 | 福岡市管轄 251 箇 | 中穂台（星野山） 中穂台（星野山） |
| 10 | 比恵 21 次 第 46 号何處出土 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／片口／ 白陶土質、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-23 | 山口駒塚 1992 | 福岡市管轄 251 箇 | 中穂台（星野山） 中穂台（星野山） |
| 11 | 比恵 70 次 001 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／片口／ 白陶土質、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-24 | 山口駒塚 1992 | 福岡市管轄 713 箇 | 1.8 倍 （古墳群解説 古墳群解説） |
| 12 | 比恵 4 次 1900 上層 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／瓦質／ 片口／白陶土質、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-25 | 比恵塚 2006 | 福岡市管轄 400 箇 | 1.8 倍 （古墳群解説 古墳群解説） |
| 13 | 比恵 19 次 2000 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／瓦質／ 片口／白陶土質、内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-26 | 比恵塚 2006 | 福岡市管轄 793 箇 | 福岡市管轄 |
| 14 | 下門戸 G-7 次 （古墳） | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-27 | 下門戸 1995、 寺崎浜民家 | 福岡市管轄 881 箇 | 古墳解説 |
| 15 | 下門戸 G-4 次 10 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／瓦質／ 片口／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-28 | 下門戸 1995、 寺崎浜民家 | 福岡市管轄 750 箇 | 古墳解説 |
| 16 | 下門戸 C-2 次 900 上層 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／瓦質／ 片口／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-29 | 下門戸 1995、 寺崎浜民家 | 福岡市管轄 882 箇 | 古墳解説 |
| 17 | 下門戸 C-2 次 （古墳） | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／瓦質／ 片口／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-30 | 下門戸 1995、 寺崎浜民家 | 福岡市管轄 882 箇 | 1.8 倍か? （古墳群解説 古墳群解説） |
| 18 | 下門戸 C-2 次 2 次 | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／瓦質／瓦質／ 片口／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-31 | 下門戸 1995、 寺崎浜民家 | 福岡市管轄 882 箇 | 古墳解説 |
| 19 | 博多 17 次 2006 (第六回) | 糸島 | 福岡県糸島市多区 | 糸島／（横縫目）／内部の凹／ 凸／瓦質／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目、 瓦質／片口／瓦質／内面無角目 | 水路港等上層土器。後醍醐平一様底足（1 周辺は少い） | 番号付 F1a-13-32 | 博多 2006 | 福岡市管轄 115 箇 | 古墳解説 |

表1：福岡市内における楽浪土器出土一覧表

これについては、関連して次に簡単な考察を加えたい。

2. 博多湾岸における楽浪土器の出土動向について

表1には各報告において楽浪土器と認識していないものも含むが、全て実見して確認している。なお表1は、寺井誠が検討した集成表（寺井2006「福岡平野の楽浪系土器」「下月隈C遺跡VI」福岡市埋蔵文化財調査報告書第881集）に、さらに補遺集成したものである。楽浪土器の個体認識については寺井2006によるが、表1の1・2・11・16~18はさらに増えたものである。このうち2の今宿五郎江11次例は整理中のものであり、個体数などは変動が有りうる。しかし、大規模調査により一度に弥生後期~古墳前期の集落の大部分を調査したにもかかわらず、今のところ確実なものは鉢（碗）類のみのようである（本市埋蔵文化財第2課杉山富雄氏・加藤隆也氏御教示）。元岡46次例は簡环であるが、これらのように簡环や鉢（碗）類のような食器（椀環類）のみが出土する例が散見される（表1-1・2・14~18）。14~18の下月隈C遺跡も大規模調査により弥生後期~古墳前期の集落の大半部分を発掘しているが、出土した楽浪土器はいずれも椀環類のみである。博多（19）や雀屋（12）のように長頸壺のみの出土の場合は評価に苦しむが、壺身の原の辻や13の高烟例のように簡环が模倣対象になっていてからずれば（寺井誠2006前掲）、楽浪土器の食器（椀環類）が当時の一部階層（首長層か）の嗜好品であったと考えができる（寺井誠2006「古墳出現前後における朝鮮半島系土器の故地とその流入背景」「日本考古学協会第72回総会研究発表要旨」）。一方、4~10の比恵・那珂では楽浪土器の器種が多様で出土の時期幅も広い。量的にはやや劣るが、糸島の諸探点遺跡（三雲、深江井牟田、御床松原）や原の辻の様相に準じ、対外交渉の拠点としてよい。椀環類のみを出土する遺跡は、首長層の嗜好により、こうした対外交渉拠点から二次的に楽浪土器を入手したと考えられよう。



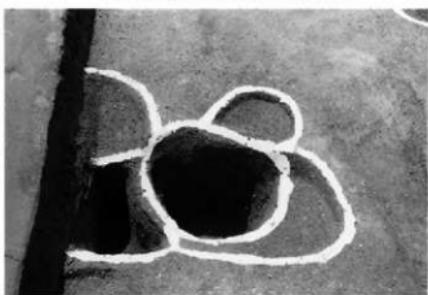
1. A-1 区造構掘削状況（北から）



2. A-1 区造構掘削状況（南から）



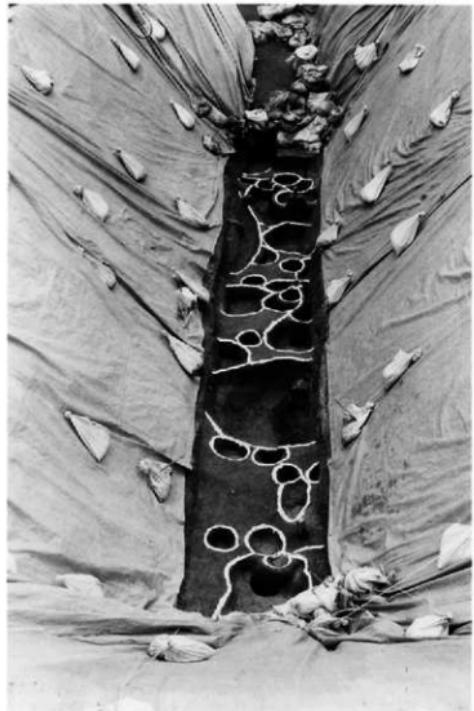
3. A-1 区北側造構掘削状況（北から）



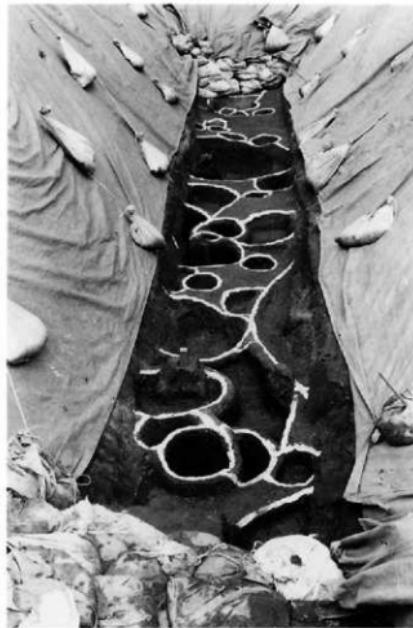
4. A-1 区中央造構 SP004 他掘削状況（北から）



5. A-1 区南側造構掘削状況（南から）



6. A-2区造構掘削状況（北から）



7. A-2区造構掘削状況（南から）



8. A-2区SE011他掘削状況（東から）



10. A-2区中央（012・014他）掘削状況（東から）



9. A-2区北半造構掘削状況（北から）



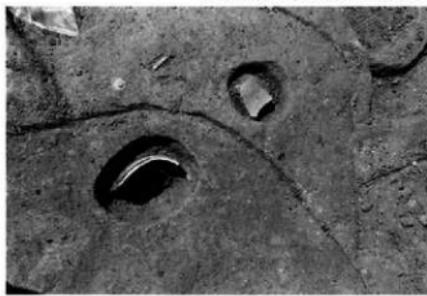
11. A-4区造構上部掘出状況（北から）



12. A-4区造構上部掘削状況（北から）



13. A-4区造構上部掘削状況および西側壁面土層状況（東から）



14. A-4区SE031・SP033上部造物出土状況(東から)



15. B-1区西側調査状況（北東から）



16. B-1区調査状況（手前の落ち込みがSD001）（北東から）



17. B-2区西側造構（001他）
掘削状況（南西から）



18. B-2区中央造構検出状況
(南西から)



20. B-2区西側造構001土層（南東から）



21. B-2区東側造構010・012土層（南東から）



19. B-2区東側造構掘削状況（北東から）



22. B-2区東側造構011（北西から）



23. B-3区SD012（東）断面状況（南西から）

報告書抄録

| | |
|--------|--|
| ふりがな | もとおか・くわばらいせきぐん 10 |
| 書名 | 元岡・桑原遺跡群 10 |
| 副書名 | —第46次調査報告— |
| 卷次 | |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 964 |
| 編著者名 | 久住猛雄 |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 |
| 所在地 | 〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667 |
| 発行年月日 | 西暦 2007年3月30日 |

| 遺跡名ふりがな | もとおか・くわばらいせきぐんだい 46 じ | | | |
|-----------------------|--|-----------------------------------|---|---|
| 遺跡名 | 元岡・桑原遺跡群第46次 | | | |
| 所在地ふりがな | ふくおかしにしくおおあざもとおかちない | | | |
| 遺跡所在地 | 福岡市西区大字元岡地内 | | | |
| 市町村コード | 40130 | | | |
| 遺跡番号 | 2782 | | | |
| 北緯 | 33° 35' 15" (A区), 33° 35' 6" (B区) | | | |
| 東経 | 130° 13' 4" (A区), 130° 12' 57" (B区) | | | |
| 調査期間 | 2005.08.08 ~ 2005.10.11 | | | |
| 調査面積(m ²) | 403.11 m ² (A区: 210.27 m ² , B区: 192.84 m ²) | | | |
| 調査原因 | 道路建設(道路拡幅工事) | | | |
| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
| 集落 | 弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代 | 溝状遺構3十土坑12以上 十井戸2以上十柱穴多数+遺物包含層 | 縄文土器+弥生土器+秦浪土器+土師器+須恵器+瓦器+瓦質土器+輸入陶磁器(中世)十国産陶器(近世) | 弥生時代の包含層(B区)、中世(平安時代末期~鎌倉時代)の濃密な遺構群(A区)を検出、秦浪土器(筒坏) |

元岡・桑原遺跡群 10

2007(平成19)年3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社九州カスタム印刷
福岡県福岡市博多区東比恵3丁目16-15